本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第105号　2024年12月1日（毎月1日発行）

中国5県絶景の旅①

「出雲日御碕灯台」

――「灯台からの響き」（宮本輝著）の舞台

訪問したのが9月17日火曜日、前日に「木次線ストロール⑪」の下久野駅を取材して、そのまま島根の出雲市街まで行って一泊。翌朝、車で日御碕を目指した。芸備線や木次線のレポートで県外に遠征するようになって、もっと先の景色を見てみたいと思うようになった。せっかく中国地方に住んでいるのだから、近隣県の名所・旧跡も歩いてみたい……。

正直、腰痛悪化の影響もある。木次線ストロールでの長距離の歩行に自信がない。今回の企画は、車で移動できる場所を選ぶことができる。来月号では、木次線ストロールを再開できればと願っている。

マリンブルーの海が水平線まで広がっている

国道431号線を西に向かうと、出雲大社の正面鳥居前を通る。昨日が敬老の日で連休明けだが、観光客の数が多い。インバウンドの外国人客の姿も目立つ。そのまま直進すると、海岸通りに出る。左折すると国道431号線、右折すると県道29号線。右折してしばらく走ると大社漁港がある。その先は海沿いの見晴らしの良い道路で、「岬めぐり」の歌でも口ずさみたくなる。

赤石トンネルを抜けた先に展望台があったので立ち寄った。残暑が厳しく、気温は30度を軽く越えている。路端やコンクリートに覆われていない斜面は、葛の葉が覆い尽くしている。この葛の根を乾燥したものが漢方薬の葛根湯の原料なのだが、この旺盛な生命力を有効利用できないものか。このままでは、厄介者のクズである。

階段を上がって展望台に立つと、マリンブルーの海が広がっている。夏の日本海に来る度に、山陰という呼び名に違和感を覚える。遠く左手に見えるのが大田市方面の海岸線で、その向こうに三瓶山の山影が望見できる。

出雲大社から15分ほどで日御碕神社に到着。後で調べると、日御碕灯台に直接行く道があるようだが、日御碕神社から日御碕灯台まで歩くコースを選んだ。

日御碕神社は、「出雲国風土記」では「美佐伎社」と記されている。楼門をくぐって右手の小高い場所にある上の宮「神の宮」と、正面にある下の宮「日沉宮（ひしずみのみや）」の上下二社からなり、総称して「日御碕神社」と呼ばれている。上の宮には素盞嗚尊（スサノオノミコト）、下の宮には天照大御神（アマテラスオオミカミ）が祀られている。厄除けや縁結びにご利益あり！

鮮やかな朱色が目立つ建物は、細部にまで様々な彫刻や装飾が施されていて、さながら竜宮城のような佇まいだ。両宮に参拝して、

下の宮の拝殿前にあるおみくじを引いた。小さな木製のだるまの底が刳り貫いてあり、おみくじが入っている。結果は末吉、自分らしいと思わず苦笑。

駐車場に車を停めて、海岸沿いの道を出雲日御碕灯台まで歩いたのだが、前日の木次線ストロールのダメージが残っていて、何度も小休止を繰り返した。食堂や土産物店が並んでいる場所に出て、空いている食堂の椅子に坐ってやれやれ。暑さで食欲はなく割子そばを注文。店内に武田鉄矢の写真とサインが飾られていて、彼が手にしたイカの丸焼きを見て、思わず注文してしまった。そばもイカもおいしかった。

日御碕神社の楼門

青い空を背景に、スラリとした白亜の塔が立っている。明治36年（1903）に設置された。百歳を超えても貴婦人の風格。世界灯台百選や、日本灯台50選にも選ばれている。塔高が43・65メートルで、石造りの灯台としては日本一の高さ。外壁は松江市美保関町で切り出された硬質の石材を積み上げ、内壁に煉瓦を使い、外壁と内壁の間に隙間を作った特殊な二重構造になっている。ちなみに日本一高い灯台は、神奈川県藤沢市の江の島灯台、塔高60メートルである。

旅行の後日、「灯台からの響き」（宮本輝著）を読んだ。妻を急病で失って以来、中華そば屋を長らく休業していた康平は、偶然に妻宛の古い葉書を見つける。「知らない大学生から届いた」と言っていた葉書を、どうして自分の本の間に挟んでいたのか。その葉書に描かれている灯台の絵に興味を引かれて、康平は灯台巡りの旅に出る。その過程で、妻の過去の秘密があぶり出されてくる。果たして、絵の灯台を見つけることができるのか――。

1600万年前の溶岩「柱状節理石英角斑岩」の上に立つ

ネタバレで申し訳ないのだが、集英社文庫の表紙の絵が、わたしの撮った写真とそっくりなのである。最後の場面の舞台が日御碕灯台で、すべての謎が明らかになる。62歳という康平の年齢が自分と同年代で、親近感を覚える。初老の男が再出発する物語なのである。この本を読んでから訪問していたら、景色も違って見えたのかもしれないが、後で読んで良かったような気もする。

参観寄付金３００円を払って、灯台内部のらせん階段に挑戦した。「杖は置いておいた方がいいですよ」と受付係に言われて、下駄箱の隙間に立てかけた。土足不可で、靴下で歩くことになる。手すりがあるのがありがたい。６階層の踊り場があり、写真や解説のパネルが展示されている。最後の急階段を直登すると、最上部の展望台の扉がある。全部で１６３段、踊り場で休息しながら、下から来た人には先に進んでもらった。

さて、展望台からの眺望はぐるり３６０度の大パノラマ、日本海の向こうに島根半島の全景、南方に中国山地の連なり、遥か北方には隠岐諸島が見える……、はずなのだ。しかし、高所恐怖症のわたしは、灯台の外の展望デッキに出ることができなかった。

せっかくここまで登って来たのだからと、なけなしの勇気を振り絞っているときに、ゴツンという大きな音が響いた。展望台から戻って来た人が、出入り口の上部に頭をぶつけたのである。イランの人だろうか。二人連れのもう一人が大笑い。それで力が抜けてしまい、頭をさすりながら階段を下りる異国人の後に続いた。末吉でいいのだと、心の中でつぶやいた。

寄稿エッセイ

「月の糞と天狗の爪」

高柴順紀（菊栽培農家）

昭和二十年代の山ん中の私たち子どもの日常は山や小川で遊びまわっていた。また農繁期も仕事の手伝いは当たり前で、家で勉強するヒマは無かったし、小学校へも遊びに行ってるようなものだった。

当然ではあるが机を離れる遠足は楽しかった。学校から一里ほど先の徳雲寺は人気の行先だった。由緒ある勅使門の側を入ると広大な境内が広がっており、飛び回るには文句のない所で、池ではコッテイ（ヒシの実）も採れた。また大人たちから鬼がすんでいたという話も聞いており、その鬼が使ったという鬼臼もあった。寺から数百メートル歩いてその池に行き、中に溜まった水をかき混ぜたりしたものだ。他にも戦国時代の山中鹿介の墓もありで、子どもに夢や想像をかきたてる地であった。中でも方丈さんから見せてもらったお寺の宝物には誰もが言葉をなくした。

徳雲寺「御月之糞」

徳雲寺「天狗肉附爪」

「こりゃあ月の糞、こっちは天狗の爪じゃ。」

遠足のことは遠い記憶の中に薄れてしまったが、みんな何時までも得体のしれない宝のことは覚えているらしく、大人になってからもお互い何じゃろうかと話す事もあった。

あれから何年経っていたのだろうか。これらの宝が理解できたのは三十代後半になってからだった。それは庄原クジラが発見されている地層が東城付近にも分布しているのだが、それを掘りおこす中国道工事や東城運動公園造成工事が始まったのだ。黒い泥岩層からマングローブを構成するヒルギの花粉化石や気根、マングローブシジミなどが確認され、東城の古環境が現在の西表島以南の亜熱帯を証拠づける貴重かつまたとない土木工事であった。また時期を同じくして粟田小学校裏の果樹園造成中の砂岩層からは、貝化石などが豊富に産出した。それまで化石に無縁の私も夢中となり、文献を調べていたら徳雲寺で見た宝物が出ていたのです。

月の糞は「美濃国御嶽の麓に月吉村といふあり。此処秋に至て夜毎に降るものあり、長四寸ばかり螺貝のごとく屈曲して色薄白き石なり、これを月の糞といふ」と菊岡詰涼『諸国里人談』（寛保二年）に記されていた。天狗の爪は「此の化石ハ一種ノ魚歯ニシテ諸国ニ頗ル多シ」と伊藤圭介『日本産物志』（明治六年）に図とともに説明してあり、月の糞も解説と図が載せてあった。

二枚の写真は方丈さんにお願いして撮らせてもらったものであるが、山々に囲まれた禅寺にふさわしい、そして子供にとってもロマン溢れるお宝と言えないだろうか。ただし二点の化石は庄原、東城、新見と続く備北層群でも出てくる珍しい物ではないのだが。

文学探訪
人生探訪の徒、倉田百三の流転⑨
2年間の“探訪”で辿り着いた百三像

音谷 健郎

長く庄原を離れていた私は、20年前にUターンして戻ったとき、最初に思ったのは「郷里の事をもっと知らなければ」ということでした。具体的に浮かんだのが「文豪・倉田百三」の名前でした。それまでに読んでいたのは「出家とその弟子」だけでした。「愛と認識との出発」は、読みかけては挫折の繰り返しでした。

私はこの2年間、にわか勉強で“百三探検”を続けました。どんな百三が浮かび上がったのか反省を交えて述べてみます。

三次を舞台にした最初の小説「汐子の転心」で、実妹を主人公とし、青年と出会う場所として登場する馬洗川の河原と巴橋（写真は、戦後に架け替えたもの）

百三像を描ききれなかったと悔いが残る第1は、百三の女性関係です。百三は「女性に甘い」「女性にだらしない」とは、巷間に広がるささやきです。どちらも違う、というのが私のたどり着いた結論です。ただ、百三は、そう見られ兼ねない行動を取っていたようには思います。

まず思いつくのが妻「高山晴子」との関係です。この結婚に散々に迷ったあげく入籍した晴子と何故、2ヶ月で除籍したのでしょうか。「田舎くさく、教養も今一つ」というのは、理由になるでしょうか。この入籍前後に現れた「伊吹山直子」は、「女子大出の才色兼備の女性」です。だからといって直子に気持が移ったというのを、世間は納得するでしょうか。

直子は無口で、やがて精神的に病みます。だが百三は迷わず直子に寄りそい続けます。「百三は女性にだらしない」と言っただけでは、百三の真実には近づけないと思います。

晩年に少女「山本久子」と熱烈な愛の手紙を2年間交換します。百三は誠心誠意で気遣いが伝わってきます。

さて、百三が上京して大森に居を構えた時、晴子、直子、それに学生時代に熱愛した逸見久子に囲まれ、それぞれとの「面会時間割」を曜日毎に割り振りました。百三独特の合理主義ともとれますが、晴子は、「倉田は一夫一婦は不自然だという。子どももあり、苦労をともにしてきた私としては、そのような理くつではおさまらず、夜どおし議論したこともあります。倉田の理想とする境地に私が達するには、尼のようにならねばと、私は倉田の家にはいかず、念仏ざんまいの生活に入ったこともありました」（青木笙子著「築地人形」）

倉田百三文学館（田園文化センター内１階）

戯曲『出家とその弟子』をはじめとした百三の原稿、著作、遺品、書画、書簡など約 200 点を展示。書簡の中には、『出家とその弟子』を絶賛したフランスのノーベル文学賞作家ロマン・ロランが倉田百三に宛てた 2 通も含まれている。

《お問い合わせ》
〒727-0013 広島県庄原市西本町二丁目 20 番 10 号
TEL:0824-72-1159

と述懐しています。

私ははじめこの行為は、鉢合わせの気まずさを避けただけのものと思っていましたが、晴子がこう感じたからには、やはり不自然なのです。

百三は短歌にも並々ならないものがあります。残っているだけで、約500首という短歌は、日々の心情だけでなく、生活苦を謳った作品も多く、ほぼ同時代人の石川啄木と比較してみたくなります。

ただし、感触の違いは歴然としています。啄木は口語体の日常語で歌ったのに対し、百三は文語体で格調高く歌う道を選び、両者の趣向は交わることがありません。

ところで私は、百三は病臥と哲学の思索に明け暮れ、内向きな生活を送っていたと決めつけていましたが、実は多くの文人や歌人と交遊していたことに驚きました。

ただ、芥川龍之介とは一高の同期ですが、百三の文章の中では、交遊を見いだすことが出来ませんでした。逆に芥川は、「真面目で一徹な作家」と百三を評しています。

一高の他の級友では、百三の手紙を保存していてその書簡集「青春の息の痕」にまとめた久保正夫、久保謙の2人とは終生の付き合いでした。

文学上で知り合った長與善郎とも公私にわたる長い付き合いでした。武者小路実篤とは、「新しき村」で親交を深めています。

もう一つ忘れていけないのが、「出家とその弟子」に対するフランスのノーベル賞作家ロマン・ローランから届いた手紙です。「現代世界の宗教的作品のなかで最も純真なものの一つ」（高村光太郎訳）と賞賛しているのです。でも百三は、文章からは外面は舞い上がるでもなく、淡々と受け流していたようです。

百三は根っからの人が好きで、外交的だったと思えます。他人の悪口や相手のいやがるようなことは、決して書いていませんでした。三次中学時代には柔道部に入り身体を鍛えた百三。根はアグレッシブと見た方がいいのではないでしょうか。

私は、百三が生涯一途だった事を疑いません。倉田百三文学は、評論集の「愛と認識との出発」に全てが凝集しているように思います。現代の青年たちには、この書を百三が抱き続けた憧れの結晶体として、読み継いでほしいと切に期待します。

◆百三と縁のあった同時代人たち◆

明治 9年←歌人 島木赤彦・歌誌「アララギ」→大正 15年

明治 11年←有島武郎・土地論争→大正 12年

明治 18年←歌人 柳原白蓮・交流→昭和 42年

明治 18年←武者小路実篤・新しき村→昭和 51年

明治 21年←長與善郎・親友→昭和 36年

明治 3年←哲学者 西田幾多郎・「善の研究」→昭和 20年

明治 22年←歌人 中村憲吉・三次中学先輩→昭和 9年

明治 25年←芥川龍之介・一高同期→昭和 2年

明治 19年←歌人 石川啄木→大正 1年

明治 24年生まれ←倉田百三→昭和 18年死去

ハロー注意報⑫
――進駐軍がいた町のはなし
髪亭（かみてい）の腕まくり

松岡 初枝

師走、どこの家でも忙しい年の暮れだが、美容室の我が家は他の家と比べてもその忙しさは別格である。十一月の七・五・三が終り、結婚式などの着付けも一段落した頃には、もう年末の調髪のお客で店はごった返す。弁当持参の人もいて、学校が休みになると私もお茶を淹れたり、タオルを畳んだりの手伝いがあり、正月のお年玉の目当てもあって一生懸命に働いた。

当時祖父は電気工事屋、水道屋たちと組んで農家の井戸に自家水道を取り付ける“農村工場”という会社を立ちあげた。農家の女性の水汲み労働から解放してやろうとの思いだった。当時上水道はまだまだ普及していなかったので、忽ち注文が殺到した。そんな忙しい仕事も二十六、七日頃には一段落し、父も二十八日が会社の御用納め、そこから二人の腕まくりでの家事が始まる。俗に言われる髪結いの亭主は女房の働きで喰う夫のことらしいが、我が家の男二人は自分の仕事もしっかりこなしている髪亭なので、今思うと本当に御苦労なことだったと思う。

祖母が日本髪を結いあげる

十二月二十九日、部屋の大掃除を早めに済ませ、昼過ぎから買い出しに行く。八百屋で大根、人参、牛蒡に里いも、蓮根にくわい、柚子や青葉。大きな買い物籠一杯に買い込んで来る。酒屋、肉屋、魚屋には三十一日の買い物リスト持参で注文して来る。祖父はお歳暮で届いた鮭の新巻を切り、頭部は氷頭なますを作る。父は大量の餅切りの力仕事が待っている。弟達は切った餅を大きな四角い竹ざるに並べる手伝い、私も紅白なますの大根と人参を切る。鮭を切り終えた祖父は店のお客へ毎年サービスで出しているお汁粉の小豆を煮る。父が切った大量の餅の半分以上がこのお汁粉用となるのだ。

店の奥の部屋に火鉢を二つ並べて、一つはお汁粉の大鍋を置き、もう一つには焼き餅用の網を置く。傍には餅やお椀、箸。そこからはセルフサービスで、お客が自分で餅を焼いて空きっ腹の虫養いにするのだ。私達子供もこのお汁粉が昼食になる。家族も店のお姉さんもこれが昼食で、家で一番の大鍋も夕方頃には空になってしまう。三十一日大晦日「またお汁粉かあ…」そう言っていると、父が赤っぽい“板垣さん”の百円札を出して「前のパン屋でコッペでも買いなさい。肉屋でコロッケ買って挟んで食べるといいよ」「ワーイ、コロッケパンだー！」。昭和三十年代、コッペパンが一個十円、コロッケが一個五円、子供三人で二個入りのコロッケパンを食べても六十円だった。そういえば中華そばが五十円だったから、今からすると二十分の一程の値だった。「残りの四十円でコロッケ八個買って来てよ、大人も食べるからネ」「ハーイ！」。年末はどこの家も忙しく子供も冬休み、肉屋のコロッケは飛ぶように売れていた。コロッケにたっぷりのソース、パンに挟むと本当においしかった。

「さあ、サブロー、野菜の下ごしらえするか」「そうだネ、早くやっちゃおう」。それから半日がかりで髪亭二人がお節料理を作ってゆく。肉屋から届いた鶏一羽、鶏ガラで雑煮用のスープを作り、別鍋で昆布と鰹節の出し汁を作る。雑煮用の野菜の下ゆで、“筑前煮”を作り、牛蒡入りの昆布巻き、くわいの煮物、台所と茶の間がスープや煮物で一杯になり、まるで料理屋の厨房のようになってゆく。「あらはっちゃん、お手伝い偉いネ」「まあ旦那さん達もすごい、うちのに爪のアカでも飲ませたいよ！」。店のおネエさんやお客達が褒めてく

れると、お調子者の私は「トントントン」と音をたてて野菜を切るが、髪亭達はニコッと笑うが手は休めない。夕方になると奥の部屋の火鉢の一つで家族とおネエさん達の夕食用の煮込みうどんを作る。豚肉や野菜たっぷり入った大量の煮込みうどん、「うちは年越しうどんだ。太く長くだよ！」。祖父と父が毎年作るうどんは、寒くて忙しい大晦日にはぴったりで、急いで腹ごしらえする店の人皆に大好評なのだ。

「さあサブロー、一杯いくか？」「あご苦労様…、何とかなったよ…」。茶の間の掘り火燵に入って二人の髪亭は熱燗をチビリチビリ。子供達も火燵に足をつっ込んで、出来たての煮物やうどんを食べはじめる頃、テレビで紅白歌合戦が始まる。

その頃はまだお客が大勢いて、ラジオではやっぱり紅白歌合戦が流れている。祖母は日本髪を結う若い人達を捌き、母やおネエさん達はパーマやセットやらで店の中を走り廻る。いつもの大晦日の風景だが、昭和四十年の半ばまでは日本髪を結う人がまだ居た。日付が替わる頃、“行く年来る年”が流れるラジオで、午前0時の時報が鳴るのと同時に、皆で「オメデトウ！」と言い合うのも毎年のことだ。そうでもしないと眠気が襲うのだ。今年入店したばかりのおネエさんは脚が棒になり、立ったまま居眠りしている。煮込みうどんを食べながらグウグウ寝てしまったり、本当に大変だ。先輩の人達はさすがに馴れたもので「ほら○○ちゃん、もう少しだから頑張れ！」。店ではお客も待ちながら寝ている。当時は労働法制なんてあったものじゃなく、年末はどこの商店も年またぎで働くのがあたり前のような時代だった。

その後店のおネエさんも増え、裏方である“台所のおばさん”“タオル洗いのおばさん”と呼んだお手伝いさんを頼んだりして、少しづつではあるが髪亭二人の忙しさは軽減していった。店に「募集」の貼り紙をするとすぐに働く人が見つかった。四、五時間働き、日払いで賃金を渡すと、おばさん達は帰りに食品や日用品などを買ってゆく。いろんな人が働いているのがあたり前で、静かな時などあまり無かったような気がする。「つべこべ言わずに動く。そうすれば何とかなるさ」、そんな家だった。

元旦の朝四時頃、やっと長い一日が終る。皆へとへとに疲れてはいるが、どこか清々しい正月の朝だった。毎年こんな年末、年始なので「絶対に店なんか継ぐもんか！」そう思っていた私だが、仕方なく跡を継ぎ、今でも働いている。もっとも私の夫は髪亭などどこ吹く風で、家事などほとんど手伝わない関白亭主であるが、彼もまだ現役で働いている。

昭和の喧噪は今はどこへやら、近頃の年末は来店するお客も少なくなり、夕方は早くに店じまいできる。あの活気はどこに行ってしまったのだろう。静かな年の暮れは嬉しくもあり淋しくもある。今は亡き二人の髪亭達はどんな思いで今を見ているのかなあと思う師走の風景である。

お節（我が家はこんな立派じゃない…）

野菜や新巻鮭を使って髪亭が料理

ぶんごうさん

――現代御伽草子㊻

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「何かおもしろい本はない？」

初老の男性にそう言われて、困ってしまった。初見（初めて）のお客さんで、どんな分野の本が好きなのかわからない。じゃあ、自分が面白いと思った本を薦めればいいじゃないかと言われそうだが、自分の嗜好が一般的ではないと自覚している。いわゆるベストセラー本はあまり読んでいないし、わたしが薦めた本の評判もあまり芳しいものではない。

ムッとする質問がいくつかある。顔も覚えていないようなお客さんから「何か新しい本は入りましたか？」と訊かれて絶句してしまう。「うちは古本しか扱っていないですよ」と心の中でつぶやく。

「二階もあるんですね。どんな本があるんですか？」もなぜか胸がざわつく。「まだ整理ができてないのでいろいろです」と言葉を濁すのだが、自分の目で確かめればいいじゃないかと思ってしまう。本の整理ができていない負い目や、古本屋としての経験や知識の無さが、コンプレックスとして根底にあるのだろう。

「どんな本を読んでるんですか？」

「ノンフィクションが多いかな。小説は嘘っぱちだから、読んでいてもしらけちゃってね。歴史ものなんかけっこう好きかな」

やり取りを聞いていた山本文吾さんが、棚にあった単行本を取り上げた。

「これを読んでみなさい」

男性客に差し出した。冲方丁（うぶかたとう）の「天地明察」。徳川四代将軍家綱の治世下、日本独自の暦を確立するという国家プロジェクトに挑んだ渋川春海の物語だ。碁方の名家に生まれた春海は、御城碁で活躍した安井算哲（二世）の別名もある。

「絶対におもしろいから」

そう断言されると、わたしもそうだと思えてくる。

「はい、これはオマケです」

会計をすませたお客さんに、紙袋に入っていた柿を一つ手渡した。西城柿のような細長い形をしているのだが、それにしてはかなり大きい。

「うちの近所で採れたんです。大きくて甘いと評判でね」

ありがとうございますとお客さんが笑顔で頭を下げた。

「実は、わたしの爺さんは棺桶作りの職人だったんですよ。家の近くに墓地があって、昔は土葬だったので、穴を掘って埋葬する仕事も請負っていた。みんなからは『穴堀りさん』て呼ばれていたそうです。わたしの父親が、その穴掘りを手伝うんだが、スコップで一メートルも掘り進むと、固い木の根に突き当たって掘りにくくなる。どうしてだと思いますか？」

「昔の墓地は、山の中にありましたからね」

お客さんの答えに、文吾さんが頷いた。

「墓地を取り囲むように、木々が鬱蒼と茂っている。明らかに、他の場所の木よりも勢いがある。墓地の死人の養分を根から吸い取って、大きくなったんです。さて、その墓地の真ん中に柿の木がありましてね。誰かが捨てた種が芽吹いたんでしょうが、どんどん大きくなった。毎年、立派な実をつける。親父もわたしもこの柿を食べて、育ったようなもんですよ」

お客さんの顔が強張って、手にした柿をカウンターの上に置いた。文吾さんがその柿を取り上げると、がぶりと齧った。

「うん、うまい！」

にっこり笑って、すいませんと頭を下げた。

「全部、口から出まかせの嘘っぱちです。でも、おもしろかったでしょ？小説もまんざら捨てたもんじゃないから、読んでみてください。喰わず嫌いはもったいないですよ」

「あれは、水上勉さんの実家の話ですよね」

バレたかとばかりに、文吾さんが照れ笑いを浮かべた。水上勉の『「般若心経」を読む』で、福井県の寒村にある実家のことが書かれている。父親が棺桶職人で、埋葬の仕事もこなしていた。水上勉は口減らしのた

めに、九歳でお寺の小坊主に出されたのだ。

「見てみい。地面の中は、木の根がいっぱいや。根ェが新しい死人がうまると、そっちにゆきたくて這いまわっとる。もち網みたいにこまかな縞をつくって、死人から死人へ、根の先をのばして網になっとる。これは、ぐるりに生えとる椿と百日紅や。樹の花は、死人の肉が根から栄養になって、咲いとる」

この水上勉の父親の話を、山本文吾流にアレンジしたわけだ。

「土葬の墓地じゃないが、うちの実家の近くに焼き場があった。親父が子供の頃には、そこの遺灰をもらって来て、畑に撒いていたそうだよ。糞尿の肥えよりも効果が高いと言っていた」

自分で小さく頷いた。

「今でも火葬場で出た遺灰は、高値で取引きされているというじゃないか。歯や人工骨に使われていた金や銀、パラジウムという貴金属が多く混ざっていて、精錬すれば金になる。残った遺灰は、ゴルフ場の芝や観賞用の草花の肥料に使われたりしているそうだよ。遺灰で育てられた芝生でゴルフをしたり、死人から回収した貴金属で作ったアクセサリーを身にまとったり、知らぬがホトケだな」

文吾さんは大手保険会社を定年退職後、読書三昧の生活をしていたが、単調な毎日に飽きてきた。若いころのような感動や興奮を得られない。池波正太郎の「原っぱ」という小説に出会った。氏には珍しい現代もので、最晩年の作品である。

「アメリカの映画女優で、いまなお伝説的な大スタアとして知られているグレタ・ガルボは、八十をこえて、ニューヨーク市の一隅に隠れ棲み、たった独りきりの生活を何年もつづけているという。

ガルボは人の目につかぬような姿で、散歩に出る。

そして、興味をおぼえた人の顔を見つけると、見ず知らずの通行人の後を尾けて行くのが、何よりのたのしみなのだとか……」

文吾さんは、夜の繁華街を散歩するようになった。女性じゃなければストーカーに間違われることもないだろうと、気になる男性を見かけたら、尾行するようになった。

「バレていたようで、露地で待ち伏せされて捕まった……」

その男性がバイセクシャルの男色家で、勘違いされてしまい、大変な目に遭ったそうだ。おれは何をしているんだと文吾さんは猛省して、単身で実家に帰って来た。

「小説の方は進んでいますか？」

文吾さんは苦笑を浮かべて、自分の頭を指さした。

「大傑作が完成しているんだけどね。取り出そうとすると壊れてしまう」

わたしはひそかに文吾さんのことを「ぶんごうさん」と呼んでいる。未来の文豪、いつか山本文吾の本がうちの店の棚に並ぶことを信じている。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載㊴

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第三部　生活に身近な項目を見る

（※項目はランダムです）

三月三日　潮干狩り

各地の干潟。特に、春の彼岸頃から四・五月にかけて潮干狩りの季節である。潮干とは、海水が引くことをいう。この時期は一年中で最も干満の差が大きく、潮の引いた干潟で、砂を掘って貝などをとる磯遊びの一種、潮干狩りには絶好である。山遊びとともに昔から行なわれていた。特に、千葉県木更津市の潮干狩りは古くから知られている。

三月十三日　十三参り

京都、嵯峨の法輪寺に古くから伝わる有名な行事である。安永年間（一七七二～一七八一）の頃から伝わっており、虚空（こくう）蔵の縁日が十三日であることに由来する。法輪寺の本尊虚空蔵は知恵授けの仏様として知られており、十三歳になる少年・少女が盛装し、福徳・智恵・音声を授かるために参詣する。

また、浅草観音の十三詣りは四月十日に、奈良市の弘仁（こうにん）寺の十三参りは四月十三日に行なわれている。

二月二日　二日灸（ふつかきゅう）

この日に灸をする習わしである。もともとは節句の一種であった。また中国の「天灸」を起源とすると言われ、八月一日もしくは十四日の行事で、子供の額に十×などの印を書いて、無病息災の呪（まじな）いをしたという。灸すえ日を年に二回、二月と八月の二日としている地方が多い。この日に灸をすえると、効果が高いと信じられた。

一年に二回、すえるのは、正月と盆の場合と同じように、宗教儀式と結びつけられたようである。

二月十四日　お水取り

東大寺二月堂で旧暦二月一日から十四日間行なわれる修二会（しゅにえ、おこない）の中の行事である。千二百年も続く奈良の代表的な年中行事で、全国に知られている。起りは、天平勝宝四（七五二）年、二月堂開祖・実忠和尚が笠置山に参篭（さんろう）して、夢のなかで十一面観音悔過（けか）の行法を拝み、これを人間界に移して行なおうとしたのが祭りの始めだと伝えられている。

一連の行事の中で、十三日の午前一時半過ぎから、呪師以下練行衆が若狭井に下り、香水を汲み取って十一面観世音に供える。これを「お水取り」という。

二月十五日　涅槃会（ねはんえ）

釈迦入滅の日である旧暦二月十五日に、釈迦の徳をたたえて各寺院で営まれた法会で、常楽会・仏忌・涅槃講ともいう。

涅槃図をかかげ、釈迦が弟子に残した最後の教典である、遺教経（ゆいぎきょう）を上げて釈迦の遺徳をしのぶ。

涅槃図とは、臨終の釈迦が沙羅双樹の下で頭北西面して臥し、周囲には大勢の弟子や天竜・鬼畜などが泣き悲しんでいる様子を描いたものである。有名なのは、京都東福寺所蔵のもので、たて約11メートル、よこ約7・2メートルと大きく、室町時代の画僧、明兆（兆殿司とも呼ぶ）が描いたものである。※写真は東福寺の涅槃図を一部拡大したもの。

涅槃会については、推古天皇（五九二～六二八年）の時代、奈良の元興寺で営まれたのが最初である。民間でもこの日を「仏の命日」とし、団子や鏡餅などを供えたりする風習がある。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」の普及に尽力している。）

海外ツアー添乗員日誌⑨

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(三)

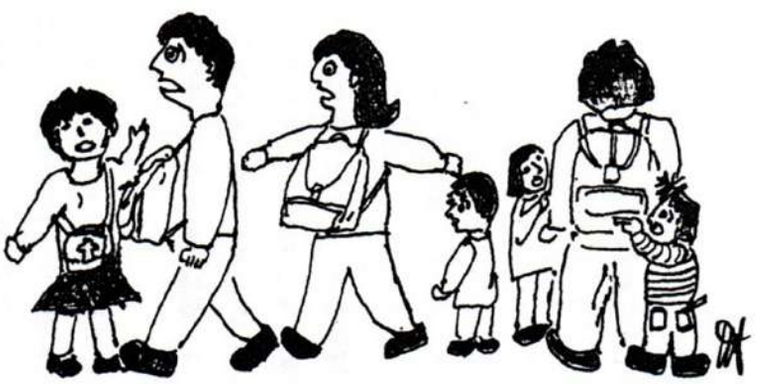
マック☆ヤマザキ

翌2月18日、日曜日。学生たちにモーニング・コールをする前に、昨日チェックインを早くして休んでもらった名誉教授のK先生に電話でご機嫌を伺い、お元気のようで安心！

全員の部屋にも電話して、トラブルが起きていないことを確認。学生たちが話題にしていた“コンチネンタル・ブレックファスト”（固いので口の中をケガしないよう大げさに説明しておいた）もご機嫌よろしく食べてくれたのでホッとした。

その後ロビーで、各自の行動に関する相談や質問を受けた。ストラトフォード（シェイクスピアの故郷）とオックスフォード（ハリーポッターのロケ地）へ行く交通手段、「蚤の市」、「マダム・タッソー蝋人形館」等への行き方を案内。そして、部屋の鍵を失くしたという相談があり、以前の旅行で同じケースがあったことを思い出し、椅子の背もたれとクッションの間を見てみたらとアドバイス、問題は解決した。

希望者を募ってウィンザー城に出発。間違った電車に乗り、途中から引き返す。行き先を確かめもせず乗り込んだのがまずかった。3駅ばかり引き返して乗り換えたのは、ディーゼルカー2両編成。大声で会話しなければならないほどのエンジン音が車中に響いた。



ジプシーの大人達は、直接犯罪に加らず子供達が旅行者の気をそらしている間に連れのものがカミソリの刃などでバッグの底を切り開き現金等を抜きとると言われている。だからバッグ類は背負わず自分の目の前に保持することが大切。ポシェットもたすきがけにしてかっぱらいにあわないようにすること。

田園風景の中を10分ほど走って到着。ウィンザー城はロンドンから西へ約50キロで、テームズ川を見下ろす丘の上にある英国王室の居城で、女王一家がしばしば過ごされるところ。ギャラリー入り口の守衛さんと立ち話。話題は日本の選挙で自民党が勝ったこと、自民党の議員の女性スキャンダルやイギリスの国会議員も秘書に子供を産ませたこと、自分は盆栽が好きで昨年アメリカに行ったとき息子に水やりを頼んで出かけたが、帰国すると無残に枯れ果てていた等々。会話が弾んで長話になってしまった。

翌19日はロンドンでの自由行動。私は明朝のフランス・パリへの出発に備えて、注意事項を掲示板に書き込む仕事をした。

・朝7時のモーニング・コール後、7時30分までにスーツ・ケースを施錠してドアの外に置くこと。その後ホテルのポーターがエレベーターでロビーに降ろしてくれる（バゲージ・ダウンという）。

・自分で使った日本への電話代、洗濯代等（個人勘定＝パーソナル・アカウントという）の支払いをフロントデスクにある“キャッシャー”で済ませておくこと。貸金庫に預けたパスポートやトベラーズ・チェック（旅行小切手）を引きとっておくこと。

これを忘れた添乗員が、自分だけ翌日別のフライトで帰国した例がある。それ以来、私はホテルを出発する朝、バスの中で「パスポートありますか」と確認してもらうようにしている。勿論、自分のことも再確認するためでもある。

さて、ホテルを出る時“事件”が起きた。生徒の一人がバスに乗っていない！　同室の生徒が「バスに乗るよ」と声をかけて部屋を出たのだが、起きなかったようだ。専門学校の私の教え子だったので少し手荒な手段を講じた。4人の生徒を彼の部屋に急行させ、彼を無理やり起こして毛布で丸め込み、彼の私物を別の毛布に入れバスに直行、空港への車中で着替え。他の生徒たちへの良い見せしめになったと、我ながら適切な処置だったと自負している。

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

冬うららからくり時計踊りだす　近藤 昌平

身についた主夫のメモ書き歳の市　冨久 光

今年またいつもの場所に彼岸花　片岡 正人

ただ一人星を見に出る冬の空　隆愚

降りしきる櫻落葉の無人駅　大槇 三代子

身に入むや宵の明星あかね空　寺内 龍二

濡れ落葉踏まれて地べたにしがみつく　赤川 冬人

急死せし夫の仲間は仕事中
冷え込みはじむ朝の現場で　松岡 初枝

投稿＆寄稿

候のことば
「熊蟄穴（くまあなにこもる）」

隆愚

二十四節気の大雪は十二月七日ですが、七十二候の大雪の次候は十二月十二日から十六日で、「熊蟄穴」の候といいます。熊が穴に入り冬籠りをする時期です。

冬籠りの間、熊は何も食べずに過します。雌はこの時期に出産し、子育てをするそうです。そして、春暖かくなってから出てくるといいます。その為、秋に食いだめをするのですが、近年、山の食糧不足からか、熊が里に出て、熊による被害が目立つようになってきました。熊の餌になる様な物の始末が叫ばれています。

庄原市でも街近くで何度も目撃されています。熊が安心して冬ごもりが出来る環境は、人間にとっても良い環境です。人里へ出てこなくてもすみますように……。

白雪のふる木のうつぼすみかとて
深山（みやま）の熊も冬ごもるなり　藤原為家（ためいえ）

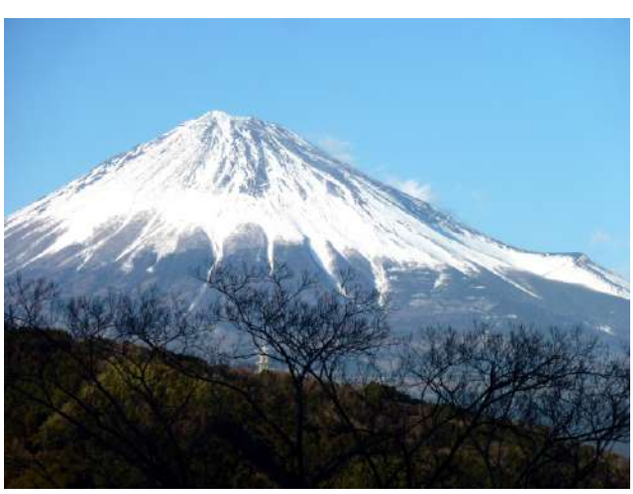
「原さんの思い出」赤川 仁洋

原博己さんが初めてどら書房に来たときのことをよく覚えている。常連客の近藤昌平さんが一緒だった。サーバーのコーヒーを出したのだが、困惑顔でしばらく固まっていた。後で聞くと、コーヒーを飲むのは何十年かぶりとかで、コーヒーは刺激が強くて身体に負担がかかると敬遠していたそうだ。十歳近く年齢が上の近藤さんとは俳句仲間でありライバルで、よく喧嘩もしたが刎頸の友だった。

飲む・打つ・買うには無縁な方だが、俳句・短歌・詩作と文学の方はなんでもござれ。女流作家の岡田美知代が晩年を過ごした庄原での唯一無二の弟子。土鈴作家としても高名で、来店時にはいつも作品を戴いた。大変な読書家で、たくさん本を買ってもらった。それ以上に自分の蔵書を惜しげもなく寄贈してくれるので、代金はいいですよと言ったのだが、それじゃあ困ると原さんは譲らない。では、一冊百円均一にさせてくださいと、原さんルールが出来上がった。奥さんを自宅で介護する主夫で、店頭無人販売の野菜もよく購入してもらった。

富士山や日本全国みな裾野

この句を見せられたときは驚いた。富士山を題材とする大会の入選作だが、繊細な原さんの心に、こんなにも雄渾な景色があることに刮目した。一徹な人であったと想う。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：12月14日（土）13：30～15：30
テーマ：「要害桜を中心とした小奴可の地域活性化について」
講師：名越峯壽氏
（小奴可自治振興センター会長）
場所：交通交流施設１（JR 庄原駅隣接）
参加費：500 円
（学生 200円、お茶菓子代込み）
申込み＆問合せ：080-3631-9125（やない）

「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：庄原市川西町 241　連絡先：080-3631-9125　やないたえこ）

当 教 室 の 目 標

（黒板のない教室）

・当教室の教育の目的は、自分で学んでいける人間を育てることです。
・基礎力をしっかりと身に付けて、自学自習力で学年を超えて学んでいきましょう。
・乳幼児～小学生を対象に、個人別、能力別に「ちょうどの学習」をしてもらいます。
・「ちょうどの学習」とは、生徒の「作業力」「理解力」「集中力」に合わせた学習です。

無料体験学習受付中！！　お気軽に問い合わせてくださいね。 対象者：0歳～小学 6 年生

「旧暦カレンダー」（販売価格：1,650円）

・日本の自然に根差した暦（こよみ）です。
・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
・新暦（太陽暦）も併記しているので便利です。
・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和7年度版 予約受付中！

（12月12日午後入荷予定）

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。

編集後記

◇12月号をお届けします。10月号の当欄で予告した「中国5県絶景の旅」は、1月遅れの掲載です。

◇先月号の「ハロー注意報⑪」のタイトルは「面白いおじさん達」の間違い。前回のタイトルがそのまま入っていました。初期配布の冊子は無訂正、申し訳ございませんでした。

◇原博己さんの俳句（俳号・冨久光）は、過去に投句していただいた作品を今後も掲載させていただきます。原さんと近藤さんは永久欠番です。

◇いよいよ師走ですね。急に寒くなって、石油ストーブの出番も近そうです。ストーブで作る焼き芋も復活!? どら書房は、年末年始も関係なく通常運店です。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090（9913）3052（赤川）
e-mail：touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第279回　　くんちいち

しょうばら九日市

◇ イベント情報 ◇

★九日市ライブは、冬季期間中はしばらくお休みです。

★来年１月の九日市では、毎年恒例の大福引大会を開催予定です。今回も景品をたくさん用意しておりますので、是非ともご来場ください。

12月9日(月)
9:00～13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
12月８日（日）～10日（火）　10時～15時
「わら細工・高齢者手作り作品展」

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド　タピオカドリンク100円引き
九日市特製ビタサンド600円

★アンドカフェ（比婆医院隣接)、２種類のスムージーが100円引き。

★どら書房、休憩室（漫画ルーム）あります！　無料です。

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　TEL/FAX(０８２４)７２－８２８５
〒７２７-００１３　庄原市西本町２-１-１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp